

International Development Center of Japan
IDCJ 国際開発センター

開発コンサルタント“見習い”として働いて



入職からの半年を振り返って思うこと

皆様の中に「開発コンサルタントになりたい!」とお考えの方はいらっしゃるでしょうか。そのような方に向けて、IDCJの新卒採用(事務嘱託制度)について私の経験を基に少しご紹介させていただきます。

私は2014年4月に新卒採用枠(事務嘱託)の4期生としてIDCJに入職し、これまでODA案件の「国内での業務支援担当」として、案件を実施する上で発生する一連の業務(応札準備、契約手続、精算など)に携わって参りました。

入職からこれまでを振り返り思うのは、まず「日々の業務を通じて、以前よりもこの業界について理解が深まってきた」こと。もちろん勉強すべきことはまだ山のようにありますが、業界の外にいた私にとって業界に身を置いて業務を実践することは、開発業界について理解を深めるための貴重な機会でした。次に「IDCJには学ぶ機会が多い」こと。これまでODA案件6件を担当してきた他、セミナー準備、広報誌の編集作業、社内研修での幹事など、多様な業務を経験することができ、業界人・社会人として学ぶ機会が多いことを日々感じております。

当制度では事務嘱託員の任期は3年で、私にはあと2年が残されていますが、任期終了までに当制度を通して経験を積み、今後それを基に開発コンサルタントを目指したキャリア形成を考えていく所存です。

最後に、実は私が当制度を知ったきっかけは、2年程前に『国際開発ジャーナル』誌のこのページに掲載された記事でした。もし、この記事をご覧の読者の皆様の中に「開発コンサルタントを目指したいが何から始めるべきかわからない」「まずは開発業界について学びたい」とお考えの方がいらっしゃいましたら、IDCJの事務嘱託制度について一度お考えいただくことをお勧めします。

(事務嘱託職員: 福士 ちひろ)



学びの環境を最大限に生かす

私は大学時代に読んだハーマン・E・デイリーの著書をきっかけに、「持続可能な発展」という概念に興味を持ち、大学院では環境経済学・環境管理学を専攻しました。貧困削減の手段として経済成長が必要なことを疑う余地はありませんが、行き過ぎた開発による環境破壊など、現在ではその手段が自己目的化している場合も見られ、物的拡大を目的とした「成長」から、質的向上を目指す「発展」へのパラダイムシフトが求められています。学びを深めるにつれて、途上国の開発に携わり、経済のみならず環境にも配慮した持続可能な発展に寄与する仕事に就きたいと考えていた私が、新卒として国際協力の

“いろは”、開発コンサルタントに必要なスキルや姿勢を学ぶ機会を得ることができたのは幸運でした。

IDCJで事務嘱託として働いて半年になりますが、現在は主に、プロポーザル作成支援とプロジェクトの精算業務という2つのプロジェクト支援業務を担当しています。両業務とも一見すると地味で、途上国の現場の最前線で活躍している開発コンサルタントの業務とは似ても似つかないものと思われかもしれませんが、しかし、プロジェクトの始まり(プロポーザル作成支援)と終わり(精算業務)に携わることで、国内にしながら開発コンサルタントに必要なスキルや思考を学ぶことができます。例えば、プロポーザル作成支援では、途上国の抱える課題に対して、経験豊富なコンサルタントが出した問題解決アプローチ(ひとつの答え)を学べ、精算業務では実際の問題解決プロセスをたどることができます。

将来開発コンサルタントとして途上国の持続可能な発展に貢献するために、この事務嘱託としての3年間を、業務支援の仕事を感じる場とするのみではなく、開発コンサルタントの核となる力を身に付ける場にできるよう努力していきたいと思っています。

(事務嘱託職員: 大野 慧)